

トピックスIII

『肺炎球菌ワクチン海外情報』

肺炎球菌結合型ワクチン（7価）の接種について、2002年—カナダ

IASR Vol.23 (2) p42-42, 2002より：

Canada CDR、Vol.28、ACS-2、2002抄訳

カナダの予防接種委員会 (NACI) は以前より、髄膜炎、菌血症、敗血症、肺炎などの侵襲性肺炎球菌感染症 (IPD) のリスクが高い2歳以上の小児（ハイリスク児）に対して、23価多糖体ワクチン接種を推奨していた。ただし、このワクチンは2歳未満の小児に対しては抗体産生能が低い。新しく開発された7価結合型ワクチンは2歳未満の小児に対して接種しても安全で、IPDの予防効果も高いことが確認された。すべての2歳未満の小児に対して2、4、6、12～15カ月時の4回接種が勧められている。2歳以上5歳未満のハイリスク児に対しては、7価結合型ワクチン、23価多糖体ワクチンの接種歴に応じて、23価および7価ワクチン追加接種が勧められている。5歳以上のハイリスク児に対しては従来通り、23価多糖体ワクチン接種が勧められている。

人工内耳植え込み者に対する肺炎球菌ワクチン、2002年—米国

IASR Vol.23 (11) p294-294, 2002より：

CDC、MMWR、51、No.41、931、2002抄訳

米国で2002年10月4日までに、人工内耳植え込み者における髄膜炎が53例報告された。細菌培養検査が実施された23例中16例が肺炎球菌によるものであった。

肺炎球菌ワクチン接種は、肺炎球菌による髄膜炎罹患のリスクが高い人に対して推奨されている。予備的な調査結果により、人工内耳植え込みは肺炎球菌による髄膜炎のリスク因子であることが示唆されたため、現在、人工内耳植え込み者全員に対して、年齢に応じた肺炎球菌ワクチン接種（7価結合型ワクチン、あるいは23価多糖体ワクチン）が推奨されている。